

グドール博士講演会

世界は変えられる

「希望」のかけ橋をつなぐ旅

ジェーン・グドール
Jane GOODALL
国連平和大使

南山宗教文化研究所では2004年から「科学・こころ・宗教」をテーマとした一大プロジェクトを実施している。この数年間、懇話会やシンポジウムなどを開催し、多くの科学者から、その研究の最新情報や、「こころ」の問題と科学のかかわりについて教えていただいた。その一環として、2006年11月11日にチンパンジー研究で有名なジェーン・グドール氏に講演していただく機会に恵まれた。2005年12月に、このプロジェクトの懇話会に招待した京都大学霊長類研究所長の松沢哲郎氏の紹介により、南山大学での講演会が実現した。その講演内容を本誌に掲載することになった。なお、講演会でグドール先生の紹介と司会は類人猿研究センターの伊谷原一所長に担当していただいた。ここでお礼を申し上げたい。

南山宗教文化研究所長
ポール・スワンソン

伊谷 講演に先だちまして、簡単にジェーン・グドール博士の紹介をさせていただきます。私は、林原類人猿研究センターおよびJGIジャパンの伊谷原一と申します。どうぞよろしく願いいたします。南山大学宗教文化研究所のスワンソン先生ならびに南山大学の先生方には、本会を開催する上でいろいろご支援いただきまして、心より感謝を申し上げます。

私がJGI (Jane Goodall Institute) の理事長をお受けいたしまして、そろそろ4年になろうとしています。JGIというのは、世界25カ国にございます。そのうちJGIジャパンは2001年に12番目のJGIとして発足しました。その間ジェーンさんには毎年来日していただき、講演会やイベントなど、いろんな催しに参加していただいております。ジェーンさんは非常に有名な方ですので、みなさんよくご存知かと思いますが、1960年にタンザニアのタンガニーカ湖畔にあり

まずゴンベというところで、野生チンパンジーの研究を世界で初めて開始されました。その研究において、これまでわれわれ人類が考えられなかったこと、たとえばチンパンジーが道具を使うこと、お母さんと子供に非常に深い絆があること、仲間のことを思いやる感情を持っていること、たとえば笑う、泣く、怒る、喜ぶなど、われわれと同じような感情を持っているということなどをつぎつぎ発見されました。そしてずっと研究を続けておられたのですが、ある会合で、チンパンジーをはじめ野生の動物が、あるいは環境がおかれている厳しい状況をお知りになりました。このままではいけないということで、いったん研究は棚上げにして、環境教育であるとか、人道教育であるとか、あるいは保護活動であるというような活動をやらなければならないということで、自ら進んで1年に300日以上世界中を飛び回っておられます。

今日は「希望の架け橋をつなぐ旅」ということでお話していただきますが、おそらくゴンベでのチンパンジーの研究、あるいはそこで見られたエピソードさらには、今ジェーン先生が非常に力をいれてJGIのなかでやっております、ルーツ&シューツ(Roots and Shoots)——根っこと新芽という意味ですが——という、若い人々がひとりひとり自分にできることから始めて世界を変えていこうという活動についてお話されると思います。どうぞ最後までごゆっくりお聞きください。どうもありがとうございました。

グドール みなさんこんにちは。ようこそいらっしゃいました。参加していただきありがとうございます。残念ながら私は日本語が話せませんし、皆さんのなかにも英語を話さない方がいらっしゃると思いま

すが、私はまずチンパンジーの言葉で挨拶させていただこうと思います。このなかでお一人お二人はご理解できる言葉です。オーフ、オーフ、オーフ……。

会場 オーフ、オーフ、オーフ……(笑)。

グドール これは遠くのほうに向かって行う挨拶です。

私は時どき自分が本当に幸運に恵まれたと思うことがあります。若いときにお金をためてアフリカに旅することができ、そこで有名な人類学者であったルイス・リーキー博士にお会いして研究の機会を与えてもらい、しかも他のどの動物でもなく、チンパンジーの研究をすることができたというのは、たいへん幸運であったと思います。なぜなら、チンパンジーというのは他のどの動物に比べても、一番人間に近い動物なのです。そして1960年代に私が研究を始めて以降も、さらにたくさんの情報が集められて、チンパンジーはヒトととても近いということが明らかになってきています。チンパンジーというのはとてもはっきりとしたユニークな性格を持っています。脳も発達しておりますので、かつてはヒトだけが行うと思われていた知的活動もある程度行うことができます。そしてお聞きになったことがあると思いますが、彼らには感情があり、ユーモアの感覚もあり、自分自身という感覚を持っております。

私は高校は出ておりますが、チンパンジーの研究をするという機会に恵まれたときに、私にはなんの学位もありませんでした。しかし、イギリスからアフリカにやってきた若かった私にルイス・リーキー博士は研究を任せました。ただ、チンパンジーの研究についてまったく訓練を受けていない若い娘がアフリカの危険性があると思われるような場所で研究をするというのは、も



ともと少クレイジーな考え方ですし、資金も充分にありませんでした。最初は6ヶ月分のリサーチをするお金しかなかったのです。

私はほんとうに小さいときからアフリカに行きたいという夢を持っていました。そして動物たちと一緒に過したいという夢をもっていたので、実際にタンザニアのタンガニーカ湖のそばにあるゴンベ自然公園に行って、その野生のなかに入ってみたときに、本当に夢のなかにいるようでした。しかし何週間、何ヶ月かたってくると、段々心配になってきました。というのは、チンパンジーは私を一目見るなり逃げ出してしまうので、本当にわくわくするような光景には遭遇することができなかったからです。

ところが驚くべき発見がありました。チンパンジーが草の茎を地下のアリの巣に突き刺して、そのなかにいたシロアリを食べていたのです。リーキー博士が雑誌『ナショナル・ジオグラフィック』に発表し、私

は同社から助成金をいただいて研究を続けることができたのです。そして私が研究を始めた後、アフリカの各地で多くの野生のチンパンジーの研究が始まりました。そのなかのいくつかは、日本人による研究です。そして今分かっているのは、研究が行われているどこの地域においても、チンパンジーはそれぞれ異なるやり方で道具を使っているということです。そしてその道具の利用ということによって学習され、世代間で伝わっているのです。これはまさしくヒトの文化の定義でもあるわけです。ですから、われわれがかつては人類しかしていなかったことが、研究によって一つずつ、実はチンパンジーもやっているということが分かってきました。そしてまた、京都大学の霊長類研究所の松沢先生の有名なアイちゃんとその子供のアユム君の研究によって、チンパンジーはいろいろなことができ、そしてなかにはヒト以上にうまくできること

があるということが分かってきています。

私が最初から特にすごいなと思ったのは、乳幼児の成長の段階です。母親と子供との関係を見ていてそう思いました。とくに家族間の関係性です。母親とその子供、同じ母親を持つ兄弟姉妹との関係を見てみると、たいへん驚かされるものがあります。そしてチンパンジーの社会においても、人の社会と同じように、よい母親と悪い母親がおりまして、どういう母親にめぐまれるかによって、その後のチンパンジーの生活は大きく変わってきます。母親が子供を保護するけれども、過剰に保護しすぎず、愛情深く、遊ぶことが出来て、そして子供をサポートしてくれるような場合には、子供がととてもよく育ちます。そのようにして育った子供たちは、大人になっていって、そのコミュニティのほかの成長したチンパンジーたちととてもリラックスした関係を持つことができ、次世代につないでいくということにおいても大きな役割を果たしていくことができます。そしてその子がオスであれば、支配的な立場に立つようになります。一方母親たちのなかには、もっと厳しくて、すぐに罰を与えがちで、子供をあまり支援しない、そういう親もいます。そのようにして育った子供たちは、大人になったときに、他の大人のチンパンジーとのくつろいだ関係を持つことが難しくなります。

しかしさらに重要なのは、今申し上げたようなことに加えて、やはり母親は子供を訓練し、しつけていくことができるということです。児童心理学者たちの最近の研究によると、ヒトは生まれてから1~2才までの乳幼児期の経験というものが、その子のそれからの人生において、人格を形成していく上でも、とても大きな意味を持っているということが分かっています。

それでは父親はどうかということですが、DNAの鑑定によって誰が父親なのかということがはっきり分かるようになったのはごく最近のことでありまして、今に至るまで父親の存在の意義については、はっきりとは分かっていないのです。ただ一般的に言って、オスというのはおおむねそのコミュニティをパトロールし、見張っている役目を持っています。そして子供たち、メスたちのために資源を確保する役割を果します。また必要とあれば、孤児となってしまった子供たちを育てていくといったこともしています。実際にわれわれのところ、3歳になる孤児がいました。お母さんが亡くなってしまって、お姉さんもお兄さんもおらず、面倒を見てくれる者がいなかったので、このまま死んでしまうのではないかと思っていました。ところが私たちが大変驚いたことに、この3歳のチンパンジーは、親縁関係のない12歳の思春期のオスの養子のようになり、生き延びることができました。このような物語が、私がお話しようとしている家族間の長期的な愛情のあるサポート関係というものを物語っています。

ちょっと想像していただきたいのですが、23歳のとても若く力強いサターンというチンパンジーが森の中を歩いていたらと思ってください。彼は突然かなり大人数のチンパンジーたちが、道のそばでなにか見つけて大さわぎをしているのを聞きつけます。ンッ、アッ、アッ、ンッ、オッ、オッ、オッ…多くのチンパンジーがこのような音を出しています。そこでサターンはとても興奮して、その群れのところに勢いをつけていって、彼らのエサとなっていた木の実をめがけて木を上ります。そして彼はその赤い実がなっている枝のところへ上って行きま

す。そこではより若いオスがエサを食べていたのですが、サターンのほうが彼より優位ですので、彼を脅かして追い払い、エサを食べ始めます。脅された若いオスは逃げて叫びます。ただサターンが気付いていなかったことがあります。その木のはるかに上の方に、先ほど追いはらわれた若いオスのお兄さんがいたのです。お兄さんは弟が脅かされているのを聞きつけて、枝を伝って急いで下りてきて、二人でサターンに対抗します。今度はサターンの方が叫びます。そうすると驚いたことに、今度は大変年老いたメス、歯も抜けて歯茎だけになり、毛もかなり粗くなっているようなおばあさんの、少なくとも50歳くらいのメスが、高いところで食べていたのですが、サターンたちが争っているところまで下りてきます。そして彼女は年老いた拳骨で、その兄弟たちをガンガンなぐっていきます。その若い兄弟たちも突然襲撃にあって吃驚したのか、そこから立ち退きます。それがサターンの年老いた母親であるスプラウトだったんですね。

この関係、この母子の愛のある関係には非常に感動し、共感するものがあります。というのも私の母親も、つねに私を支援してサポートしてくれていたからです。私がアフリカに行って動物たちと暮らし、そのことについて本を書きたいという夢を語ったとき、笑わなかった唯一の人が私の母でした。覚えておいていただきたいのは、私がこういったことを夢見るようになった50年から60年くらい前というのは、女の子がそんなことをするのは絶対にありえないと思われていました。でも母はよく言いました。「ジェーン、あなたが本当になにか望んでいてがんばれば、そこにあるチャンスを活かし、そして決してあきらめなければ、

道はきっとみつかるのよ」。

ただ、大変残念なことに、チンパンジーも人と同じように暗い面を持っています。きわめて横暴な暴力を振るうことも可能なのです。また、二つの異なった社会的な集団のオス同士の原始的な戦争のようなものも起きることがあります。可能性としては、私たちはヒトとチンパンジーの共通の祖先から700万年ほど前に攻撃的な部分を引き継いでいるということがあります。そして確かに、世界中のどこを見ても、ヒトがさまざまな状況や条件において、大変攻撃的になっていくという実例をみることができ

ます。しかしながらまた、このように見ることもできます。そのような攻撃的なものを持っているのも事実であるならば、慈悲であるとか、他者に対する思いやり、そのような心も引き継いでいることも事実であるということです。私たちひとりひとりのなかに、二つのまったく対立するような要素があるわけです。私たちひとりひとりがどちらの道に行くのか、選択しなければなりません。そしてまた、人と大変似通った種類のチンパンジーを研究することによって、私は具体的に「この点がとても違っているな」ということを指摘できる機会に恵まれています。

もちろんヒトとチンパンジーの違いにはいろいろな点があるわけですが、もし一つ選べといわれたら、私は特に、ヒトがものすごい言語能力を獲得しているということが大きく違うと思います。野生のチンパンジーも、ジェスチャーであるとか、音であるとか、大変豊かなコミュニケーションの手段を持っています。捕獲されたチンパンジーは、言語を学習することもできます。たとえば、アメリカの耳の不自由なヒトの



写真: 松沢哲郎

手話を学習しているチンパンジーもいます。ただ、話し言葉を人が持っていることによって可能になることがあります。それはあるか先の未来の計画を立てることができるということです。また、子供たちにそこには存在していないものやことを教えることができます。そしてまた、ヒトは何人かがいっしょに集って話し合い、アイデアを交換することができます。それによってアイデアが変わっていったり、様々な人がその人の持っている知識によって貢献したりすることができます。

ゴンベ自然公園には大変素晴らしい滝がたくさんあるのですが、ある滝は80フィートの高さから直下しています。その滝の流れている水によって、常にそこには涼しい風が吹いていて、そばにあるシダ類がゆれています。オスの群れが時どきその滝のところへいくと、興奮して毛が逆立つのです。

時にはとてもリズムカルにまるでダンスしているように体を揺らして動くことがあります。通常チンパンジーは水を避けるんですけれども、水しぶきを楽しんでいるかのようなのです。また、その谷の底には岩があるのですが、チンパンジーたちは滝つぼに次々と石を投げます。それによって静かな谷間にバシャ、バシャと水音が響きます。時には彼等は立ち上がり、蕨につかまって、水しぶきの中を揺れたりします。なかにはじっと岩の上にすわっているチンパンジーがいて、水の流れを指さしながら見ているという、そんな光景を目にする幸運に恵まれることもあります。このような振る舞いを見ていくと、これはヒトの場合であったら、畏敬の念であるとか、不思議さと呼ぶような、そういう感情の表れではないかと思います。そしてもしチンパンジーが言葉を持っていて語る事ができたならば、そ

して彼らにとってその体験がどういう意味をもっていたのかを語る事ができたなら、それはある種の原始的なアニミズムの感覚のようなものにつながっているかもしれません。たとえば水とか太陽とか月とかいろいろなエレメントをヒトが崇拜するような感覚を持っているのかもしれませんが。

われわれは長年このチンパンジーという素晴らしい生きものを、野生のあるいは捕獲された状態で研究してきました。彼等はわれわれと動物の王国とをつなぐ架け橋のような存在です。もちろんわれわれ人間も動物です。生物学的に言うと、われわれは第5レベルの、大型の猿人なわけです。そしてチンパンジーがなによりも私たちに教えてくれたのは、性格や心、感情などをもっているのは、ヒトだけに限らないということです。

ですから、チンパンジーとかゴリラとか、アジアのオランウータンとか、その他のさまざまなサルたちが、地球上から徐々に減ってきているということはとても悲しいことです。たとえば100年前には100万頭とか200万頭もいたと思われるチンパンジーが、今では多く見積もっても20万頭あるいはそれ以下だと思われれます。チンパンジーはその生態系、ハビタット（生息地）を失いつつあります。また、捕獲されるチンパンジーの数が増えていて、ある程度はペットとして販売され、あるいはブッシュミートとして、食肉用に捕獲されていくチンパンジーもいます。現在では、ハンターたちは森のもっとも深いところまで道路で入っていくことができます。その道路はアフリカ以外の外資系の伐木会社を作ったものです。そしてその道路によって、残された森の奥に入っていったハンターたちはありとあらゆるものを撃って捕獲します。ゾウ、

ゴリラ、チンパンジーなど、捕まえられるものはすべて捕まえようとするのです。

これは生存のためにしていた狩りとはまったく違った種類のものです。生存のためにしていた狩りでは、家族が食べていくために必要な分だけをとっていたわけですが、今私がお話したのは商業用の狩り、コマースャル・ハンティングです。お金のために行われているのです。そしてこのコマースャル・ハンティングというのは、都会に住んでいる富裕層によって行われていて、海外まで送られているということもおこっているわけです。これはまったく持続可能な形ではありません。これによって森の中の多くの生きものたちが絶滅していています。あるいはまた、飢餓に苦しんでいる人たちがさらに食料を増やすために、作物を植えていくことによって土壌がどんどん浸食され、砂漠化が進みます。旱魃も以前よりひどくなっていますし、洪水も以前よりひどくなっています。同時に人類はどんどん数を増やし続けていて、それによって多くの人々が苦しい生活を送るという結果になっています。人々は飢餓に苦しみ、また病気に苦しみ、極貧に苦しんでいる状態です。それはアフリカ全土もそうですし、その他の開発途上国においてもそうした状態にあります。それに加えてアフリカ全体で内戦が続いていますし、それに伴う難民の数も増えています。

それ以外にも、この地球でなにがおきているのでしょうか。私たちはたった一つしか地球をもっていないわけですが、その地球に毒を与えているわけです。空気を汚染し、水質を汚染し、土壌を汚染しています。たとえば工業産業の廃棄物が環境のなかに排出されていきます。家庭から出るゴミのなかにも有害物質は多く含まれます。特に一

番ひどいのは農薬であると思います。農薬というのは、実際は毒であり、殺虫剤も入っています。それは第二次世界大戦のあとに、化学兵器として開発された物質なのです。世界のなかには、その地域で生まれてくる子供たちが汚染された大気や水や食べ物によって病気になっている、そういう地域があります。そうした有害物質は、どこから発生したものにせよ、たとえば土壌にあったものが雨水などによって運ばれて、最終的には海とか湖に流れ込んでいきます。そして多くの重金属は魚の体内にたまっていきます。ですから海や湖で取れる魚を食べるのは体にとって危険であるという地域もあります。それに加えて、世界各地で水の量がどんどん減ってきています。地下水の量も減っていますし、水源地の量がどんどん少なくなっています。この地球上で現在、きれいな飲み水にアクセスすることのできない人々が、何千何万といます。現在、石油をめぐる戦争が行なわれています。人間は石油がなくても生きていけますが、やがて水をめぐる戦争になったらどうでしょうか。ヒトは水なしに生きていくことはできませんが、水はどんどん少なくなっているのです。

また、世界中の環境汚染による温暖化が進んでいます。石油系燃料を使うことによって増えていく環境汚染、それによって温暖化が進んでいきます。北極と南極の氷はどんどん溶けて行き、それによって水位があがってきています。そしてまた氷河も溶けてきています。たとえば富士山に残っている雪の量は少なくなっているのではないのでしょうか。そして残念なことですけれども、現在の政治的状況では、再び核が話題になってきています。広島と長崎の経験を持つ日本にとっては特に脅威を感じる話題

であると思います。

私は世界各地を旅していて、最初はアフリカの森の中のチンパンジーを守るための活動をしていたわけですが、やがてこのアフリカの問題が、世界の他の地域の問題とつながっているということがだんだん分かってきました。そして私が出会う若い人たちのなかには希望を失っている人がだんだん増えてきています。彼らは落ち込んでいたり、すごくにがにがしい気持ちになっていたり、やる気をなくしていたり、ときには怒りを覚えていたり、暴力的になっていたりする若者たちです。彼等は本当に思慮深い若者たちです。高校生や大学生、あるいは大学を卒業したばかりの人です。そういった若者たちと話してみると、彼らの言うことはすごく共通しています。それは、「あなたたちの世代が私たちの未来を傷つけてしまった。そして私たちの世代にできることはなにもないと感じている」ということです。

このことによって先ほどご紹介いただいたルーツ&シューツというプログラムがスタートしたのです。ルーツ&シューツというのは、とても象徴的な意味を持っています。ルーツ（根っこ）というのは土台を作ります。そしてシューツ（芽）は大変小さなものですが、大きな力を持っていて、うまく成長して行けばレンガをも打ち砕きます。このレンガの壁というのが、私たち人間が今までに作ってしまったさまざまな問題のシンボルであると考えてみてください。環境的な問題も、富の不均衡といった社会的な問題もそうです。ルーツ&シューツというのは、希望なのです。多くの若者たちが、こうした多くの問題に取り組み、実際にその壁を打ち破っていくことができるのです。

そしてもっとも重要なメッセージ、それ

は私たちひとりひとりが日々違いを作っていくということです。私たちはみな選択肢を持っています。どのような違いを作っていくのかという選択肢です。ルーツ&シューツは、常に三つのプログラムに取り組んでいます。人、動物、そして環境に違いを作っていくというプログラムです。ここで私が先ほどお話した、言語が持つ価値を見て取ることができます。子供たちはディスカッションすることができます。いろいろある問題の中でも、特にどの問題を取りあげていこうか、考えることができます。若い人たちがどんなプロジェクトを選んでいくのか、それはその人の年齢にもよります。今私たちのところに集っているのは、下は幼稚園児から上は大学生までいます。また、その若者が住んでいるのが都市部なのか、田舎なのかということによっても違います。彼らが富んでいるのか、貧しいのか、どの国に住んでいるのか、どんな宗教を信じているのかによっても違います。

現在、このプログラムは90カ国以上で行われています。全部集めると、9000の活発に活動しているグループがあります。そのなかには、一つの学校全体を一つのグループと考える場合も含まれます。プロジェクトのなかにはゴミを集めてリサイクルをするといった、大変シンプルなものもあります。なかにはより複雑なプロジェクトもあります。たとえば川の流をきれいにするために、上流で川を汚染している人たちに手紙を書くというようなものです。また絶滅に瀕している種について学習し、その種を保護するためにお金を集めていくとか、迷子の猫や犬をケアするようなプログラムや、動物園の動物、研究用動物のためのプログラムもあります。あるいは、家族から見捨てられた状態になっている老人の問題

をあつかっているグループもあります。またHIVの被害者になっている人たちとか、ストリート・チルドレンとか、ホームレスの人たちのためのプログラムもあるかもしれません。私は現在では年間300日以上旅をする生活になっているわけですが、そんな私が元気付けられるのは、どこに行っても若者たちの輝く目に出会うことができるからです。そして、「ジェーン博士、世界をよりよい場所にするためにこういうことをしているのですよ」と話してくれる人たちに出会うことができるからです。また、世界各地のルーツ&シューツのグループ同士の関わりも深まってきています。異なる場所で同じようなテーマを扱っているグループ同士がつながっていくということが増えています。

私たちは若者たちの評議会、ユース・カウンシルというものも開いています。高校生や大学生レベルでのユース・カウンシルが行なわれていて、そこに参加する若者たちは、言葉によって自分たちの思いを正確に伝えることができ、情熱的で、リーダーシップを発揮できる若者たちです。そういった若者たちが一つのところに集り、ブレイン・ストーミングを行っているのを見ると、本当に希望があるな、という感覚をもてるのです。議論がとても活発に行われているからです。ここで技術が大いにわれわれの役に立ちます。たとえばビデオ会議を行ったり、インターネットを使ったりすることができます。

私が世界各地を旅して最もよく聞かれる質問は、「本当にあなたは希望を持っているのですか」というものです。「実際にチンパンジーが減っていて、貧困や犯罪の増加とかテロリズムとか、そういったものを目の当たりにして、それでも希望を持って



いるのですか」という質問です。人は私に挑戦してきます。「私の目を見て、正直に、希望を持っているといえますか」と。答えは「イエス」です。でも「しかし」が付きます。それは、希望は政府にかかっているのでもなく、企業にかかっているのでもなく、私たち自身にかかっているということです。環境に対して害になるようなことをしている産業や企業のことを学ぶと、私たちはそれに腹を立てますが、それと同時に、自分たちにはなにをすることができるのか考えることができます。とてもシンプルです。私たちは彼らの製品を買うことをボイコットすることができます。そうなったら、彼らは製品を作る方法を変えなければならなくなるし、さもなければ彼らはつぶれてしまいます。

また人々にはさらに教育が必要です。どの企業がよい企業であって、どの企業があまりよくないのかということが分かるための教育です。残念ながら多くの国において

は、人々が自由に自らの政治的代表者を選択することができない状況があります。つまりデモクラシーが存在していない国があります。しかしながら、民主主義に恵まれている私たちには選択肢がありますし、責任もあります。実際に私たちが持っている投票権を生かしていくこと、実際に活用していくという責任と選択があります。多くの人たちが言っていますけれども、なぜ前回のアメリカ大統領選挙でブッシュ政権が勝利したのか、それは若者たちが投票しなかったことが原因ではないかと言われていきます。いろんなことに反対している若者たちが実際には投票しなかったことが原因ではないかと言われています。人々が、自分の持っている権利を活用しない、その理由の一つは、世界中の様々な問題を見たときに、自分にできることはほとんど何もないと思って、そして実際になにもなくなってしまふからです。

この点は子供たちのほうがよほど分かっ

ています。子供たちは理解しています。自分たちの行くことが違いを作っていくことができるということ。私たちはそのように教育していくことはできますし、日々小さな選択をしていくことはできます。そしてその小さな選択によって、日々の生活のなかで違いが起きてきます。そしてより倫理的な生活、倫理的な社会というものができてきて、やがては小さな変化が集って、必要なだけの大きな変化を起こすことが可能になります。

私にはなぜ希望を持つことができるのかということに対する理由があります。青臭いかもしれませんが、それは信じる事のできる四つの理由です。まず一番目は、すでにお話ししましたが、若者たちのエネルギーとコミットメント、情熱そして勇気です。彼らはなにが問題なのかということが分かれば、そこで行動を起こすエネルギーを持っています。

二つ目は、私たちの頭の中に入っている灰色の物質、つまり、人類の脳です。人類の脳というものは、人類を月まで飛ばすこともできましたし、インターネットを作ることもできたのです。私たちヒトというのは、問題を解決していく生きものです。だからこそ私たちはこの地球上の一番大きな支配権を獲得することができたわけです。そして、この自然界とより大きな調和を持って生きるための技術というのは、すでに開発されています。私たち人間というのは、せっぱつまったときに、最善の結果を残せるような生き物なのです。実際に私たちはせっぱ詰まった状況にあります。私たちはインターネットなどによるドキュメンタリーを使って、人びとの理解を深めることができます。私たちが自然破壊や天然資源に対する致命的な枯渇を進めてしまうの

れだけ近づいているのか、それを示すことができます。

三つ目の要素というのは、自然の持っている弾力性、粘り強さです。完全に破壊されたと思われていた自然が甦ってきたという例があります。汚染されてしまって、完全に破壊されてしまったと思われていたところが、回復してきたという例はたくさんあります。湿地帯やプレーリーも修復されてきています。森林というのはいったん破壊されてしまったら、もとのままの状態になることはないかもしれませんが、木々や動物たちは戻ってきます。汚染されてしまった農地も回復していくことができます。そこで有機栽培を行っていくことができます。私たちにできることは、有機栽培された食品を買っていくということです。私は長崎に行ったときに、爆発後の爆心地の風景の写真を見せてもらいました。まるで月面のような荒涼とした風景でした。そこに緑が戻ってくるには30年以上かかるだろうと言われていたのですが、それは間違いでした。それよりもずっと早く、緑は戻ってきたのです。もちろんまだ放射能を含んでいるのですけれども、彼らは育ってきました。そして本当に小さな苗が、原爆にあっても死ななかつたのです。それはずっと長い間小さなままだったのですが、今は大きく伸びて、大きな木になりました。そして春になると新しい葉っぱが出てくるのです。私はその葉っぱをいただいて、希望の徴として持ち歩いています。また、絶滅の危機に瀕している動物の種も、甦ることが可能です。たとえば捕獲して人工的に受精していくとか、保護区を設けてその中で生育していくことによってもう一度回復することも可能です。

そして四つ目の希望の理由とは、人間の

持っている、到底解決不可能に見えるような状況においても諦めずにやりつづけて、解決してしまうような精神力です。そのような人々を私たちは知っています。それは歴史上の偉大な政治家であったり、あるいは名もない普通の人々であったりしますが、ほとんど解決不可能であると思われるような障害を乗り越えて信じられないように素晴らしい人生を生きている人が世界中にたくさんいます。たとえばそのような人の一人で、ゲイリー・ホーンというアメリカ人がいます。彼は私にマスコットをくださった人です。ゲイリー・ホーン氏は25歳のときに光を失って盲目になったのですが、彼はマジシャンになりたいという希望を持っていたのです。周りの人たちは、「目が不自由だったら上手なマジシャンにはなれないよ」と言ったのですが、彼はそれでも「やってみる」と言いました。そして彼は子供たちのためにマジックショーをしましたが、子供たちは、彼は目が不自由だということが分かりませんでした。やった後で彼は子供たちにそのことを伝えて、こう言いました。「人生には思いがけない出来事があるけれども、そこで諦めてはいけません。必ず解決の道は見つかるから」。彼はスキューバ・ダイビングとか、スカイ・ダイビングとか、そういうクレイジーなこともします。

その彼が私の11年前の誕生日にぬいぐるみのチンパンジーをプレゼントしてくれました。私はそのチンパンジーを見て、彼にその尻尾を握らせて言いました。「ゲイリー、あなたは目が不自由だからチンパンジーの毛色がおかしいのはいいけれども、この尻尾はなんなの」。ミスター・Hと呼んでいるこのぬいぐるみが、世界中の子供に教えていることがあります。それはチンパンジーには本当は尻尾がないということです(笑)。

でもゲイリーは言いました、「そんなことはどうでもいいじゃないか。とにかくこれらいつも持っていてください。僕の心はいつもあなたとともにありますから」と。この11年の間に私はミスター・Hと57カ国を旅し、日本には10回来ました。彼に触れてインスピレーションを得た人は多分300万人以上いると思います。彼が私のパートナーです。世界各地を旅して、「希望はない」と思っている人たちにも「希望はある」というメッセージを伝えていくときのパートナーなのです。

しかし、世界はとても広いのです。私が各地に行って話す方々の数というのは、全体から見ればほんのわずかに過ぎません。その上彼も私もだいぶ年を取ってきました。そこで去年ミスター・Hのジュニアができました。彼もかつてはこんな形、こんな色だったのです。彼の首にはメッセージが着いています。ゲイリー・ホーンからのメッセージで、「このミスター・H・ジュニアを手元において、ジューン博士とミスター・Hが希望を世界に伝えることができるように手伝ってください」というものです。このミスター・Hの売上金は、JGI、それに世界中の人間、動物、環境を助けるための基金として使われます。ここには学生の方たちも多く参加なさっていますけれども、もし興味があるようでしたら、ルーツ&シューズの日本のプログラムに参加する希望があると、名前を書いていってください。会場にはまだすごく若い方がいますけれども、あなたも参加することができます。日本でより多くの若い方がルーツ&シューズに参加して下さることを希望しています。生徒たちも、先生たちも、親たちも、とても簡単です。集ってお話をするだけです。世界がよりよい場所になるために、自分たち

にできることはなんだろうという話です。英語を話す方にとっては、大変素晴らしいサイトがあります。<http://www.rootsandshoots.org/>というサイトです。希望はあります。でも希望は私たちの手の中にあります。私たちに掛かっているのです。

時に私にこういうことをおっしゃる方がいます。「より倫理的に作られている製品を買いたいと思いますが、そのほうが高くつくので買えません」と。私はこう言います。「あなたが買っているもののなかに、本当に必要ではないけれども買っているようなもの、それを考えてみてください。そしてそれよりもより倫理的に作られているものを買うようになさってはいかがでしょうか。そしてお子さんがいらっしゃる方、お孫さん、姪、甥、兄弟、姉妹がいらっしゃる方、この世界によりよい未来を残していくために、もう少しお金を使ってあげることはできないでしょうか」。今晚の私からのメッセージは以上です。サイン会を行なう前に、時間があれば質疑応答をしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

伊谷 せっかくの機会ですので、もしなにかご質問などありましたら、どうぞ遠慮なく、お願いいたします。

フロア 世界にとっての希望は政府やビジネスではなく、自分たちにかかっているということですが、大型の経済開発や医療開発のプロジェクトなどはどうでしょうか。個人が希望を持つというそれだけで大きな違いを作ることができるのでしょうか。たとえば中国はその資源を使ってアフリカのための灌漑のプロジェクトをエチオピアなどで行なっています。アフリカのためと言いながらそこには彼等自身の利益もあり、そういう形で多くの資源を使っているのです。

グドール もちろん、影響力を持つのは

個人だけではありません。国家や企業も貢献するのであって、彼らにはそうしたことができないと言っているわけではありません。私も少し中国の話をしてしまおう。実は私は今中国から来たばかりなのですが、今中国ではルーツ&シューツが活発に活動を行なっています。私も中国に行くようになって10年が経ちますので、だんだんその状況について理解できるようになってきました。中国は確かに自由なデモクラシーの国家ではありません。中国がより豊かになってきたのはみずからの天然資源を搾取し、自らの環境にダメージを与えるという代償を払ってのことです。中国は以前の他の国々と同じように、天然資源の宝庫としてアフリカを見るようになってきています。特に木材と鉱物ですね。私はヨーロッパの人間として罪悪感を覚えますし後ろめたさも感じます。長年にわたってアフリカを植民地化し、搾取してきたわけですから。もちろん残してきたものもありましたが、それ以上により多くのものを奪ってきました。私は中国が同じことをするのではないかと、たいへん危惧しております。

しかしそのような中国においても、個人が大きな影響をもたらすという例はたくさんあります。時間がないので話すことはできませんけれども、個人が政府や大企業に対して立ち上がり、なかには命の危険を冒してまで違いを生み出した、そういう結果が生み出されています。なかには自分が信じることのために命を捧げるという殉教者的な行為もあります。たとえば天安門広場で戦車に向かっていった若者、そして亡くなった若者たちです。私は彼らの死によって事情が変わるということを希望しています。彼らの死によって中国政府も前よりは少しは開放的になったのではないかという

ことを、私は期待しています。この質問をいただき、どうもありがとうございました。大変重要な質問です。このテーマについて話すと何時間もかかってしまうのですけれども、残念ながら時間がありません。

フロア 先ほどのチンパンジーのエピソードで、養子になった3歳のチンパンジーはどうなったのですか。

グドール 大変残念なことに彼は怪我で亡くなりました。それは世話をしていた12歳のオスとは関係のないことで、おそらくは復讐されたのではないかと思われます。たくさん傷跡がありましたので。

長期間にわたる研究というのは、こういったストーリーの宝庫です。それが本当に豊かな示唆を与えてくれます。このゴンベの調査だけではなく、マハリ・マウンテンとかギニアとかバトゥとか、その他のすべての地域の調査に共通して言えることです。

最後に一言申し上げたいと思います。私たちが一人でできることには限りがあります。私たちはチームになって、いっしょにやっていかなければいろんなことはできません。たとえば伊谷先生のお父様は、私のゴンベの調査にリサーチャーとしてはじめて迎えた研究者でした。また、京都大学霊長類研究所の松沢先生も、JGIが日本で結成されてから、それが大きく育っていくために大きな支援を与えてくださいました。それに加えて彼の研究室のアイちゃんとアユム君についての大変素晴らしい調査研究というものもあります。また、今日は多くの人々がボランティアとして働いて下さっていました。通訳の方にも感謝いたします(拍手)。

この翻訳は、大空夢湧子氏が通訳したものを長谷千代子氏書き起こし、それを南山宗教文化研究所のスタッフが校正して作成された。